
NT ' s ロード

篠宮 夏希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N T ' s ロード

【Nコード】

N 6 8 8 8 Y

【作者名】

篠宮 夏希

【あらすじ】

引きこもりの中学二年生の主人公に、超能力開発発気が届いた。それを使ってみたは良いが、特に発動する気配がない。そんな時、声が聞こえて近くの公園へ行くと、仮面の男が現れ、巨大な光にのまれてしまう。主人公が、次に目を覚ましたのは異世界！？引きこもりだった主人公は、仲間と出会い、別れ、超能力を使って異世界を攻略していくお話です。

第一話：プレゼント（前書き）

これを開いてくださって、ありがとうございます。

作者の夏希です。

この作品が、初投稿となりますが、良ければ読んでもらえると助かります。

第一話：プレゼント

今、日本における総人口は、約2億3000万人。

その内、高齢者が4000万人幼児が5000万人とされ、残りの数は小・中学生に高校生、さらに青年から中年までの人物が当てはまる。

どうにか、少子高齢化を改善した日本。

しかしその一方で、未だに解決しない問題がある。

そう、それは2075年になっても直らない、『不経済』さだ。

今述べていた残りに当てはまる者たちの、実に40%が無職だと言われている。

成人しても職につかない、あるいは着けずに親のスネをかじって生活しているものを、

『ニート』という。

このニートというのは、成人者だけに留まらず、未成年者にも『引きこもり』などといった形で浸透していった。

そして俺、新條 赤星（しんじょう あかぼし）もまた。

「・・・ ちゃん、お兄ちゃんってば！」

唐突に、俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「なんだよ」

俺は夢中になっていたネットゲームから目をはなし、耳にかけていたヘッドフォンを外す。

「兄貴・・・学校・・・」

後ろを振り向くと、そこには二人の男女の姿があった。

「そうだよ、お兄ちゃん。今日こそは行くこうね！」

ニツコリと笑ってみせる女の子。

一方で、横にいる男の子は無表情で、なんだかポケーっとしている。

ちなみに言うと、こいつらは俺の弟妹で、ひとつ下の双子だ。

妹の方が新條 瑞希（しんじょう みずき）、弟が新條 陽輝（しんじょう はるき）と名付けられていた。

「嫌だ、絶対行かない」

そう、俺は今中学二年生にして引きこもりになっている。

「なんで行かないのよ！？ お兄ちゃん別にいじめられてる訳じゃないんでしょ？」

たしかにその通りだ。

俺が学校に通っていたのは去年の6月後半までだが、友達関係も良好。

特にいじめられるなどといったことはなかった。

俺が学校に行かない理由。

「面白くないから・・・」

ぼそつと呟いた。

「はぁ？ なにそのわがまま、赤ちゃんみたいだよ？」

さすがに赤ちゃんは、ここまでグレてないだろ・・・。

「ほっとけ」

俺はふてくされて、ベッドに潜り込む。

頭だけ突き出し、どっかの奇妙な動物みたいなことになっていた。

「じゃあ、どうやってたら学校に来てくれるの!？」

怒鳴りつけるように瑞希が言った。

はつきり言って、どっちが年上なのか分からない。

「だから、何度も言ってるように、俺は学校へはどうやってもない!」

俺は二人によく言い聞かせてやるが、

「じゃあ、何度でも言わせてあげるわ！ 学校に・・・フグウッ」

瑞希のセリフの最後がおかしくなってしまったのは、陽輝が瑞希の口を塞いだからだ。

「瑞希・・・そろそろ・・・時間」

くっ、と一瞬うだっていた瑞希だが・・・、

「明日こそは連れていってみせるわ!」

という捨て台詞を吐いて、俺の部屋を後にした。

(やれやれ、明日も来るのか)

俺はため息をつきながら起き上がり、ネットゲームの世界へと帰っていく。

「っと、もうこんな時間か」

部屋の壁にある時計を見ながら言う。

現在時刻は、11:45。

朝から何も食べていない俺は、昼食を取るために出かける。

家にはきちんと鍵をかけ、パーカーのフード帽を眼深くかぶる。
今日は平日で、普通なら学校もあるはずなので、警官などにバレると面倒だったからだ。

近くのコンビニを目指して、俺はダラダラと歩く。

これは補足だが、俺は4人家族だ。

俺、瑞希、陽輝、そして母親で暮らしている。

親父は研究者という仕事柄、なかなか遊ぶことはできなかったけど、かつこよくて優しい、『良い親父』だった。

たまに帰ってきたときは、俺が実験台にされてアホなことでもしてたもんだ。

俺の、赤色の髪の毛も、親父が『名前通りでかつこいいだろ？ ガツハツハ！』と言ってやられた。

しかし、その親父はというと、俺が中学に上がる少し前に他界してしまった。

そのため、生活費はすべて母親が支払っている。

まあ、言っちゃあ悪いが、母は法律関係の仕事に就いているので、お金には対して困っていなかった。

<ピンポン!>

入店の合図で、店員が「いらっしやいませ〜」と笑顔で挨拶をしてきた。

俺は昼食を求めて店内を歩く。

(お、これでいいかな)

俺が手にとったのは、『新商品! チョコといちごが奏でる絶妙なハーモニー』。

なんて、売り文句が書いてあるスティックパンだ。

他にもスパゲッティや、飲み物を購入。

「ありがとうございました〜」

こうして俺はコンビニから再び外へ。

空を見ながら来た道を戻っていると、太陽がこちらをギロリと睨みつけていた。

「溶ける……」

基本引きこもりの俺には、この太陽が死ぬほどキツイ。早く夏が終わって欲しいと願うばかりだ。

「ん？」

そこで俺は、家の前に一台の運送用トラックを発見した。

家の門の前でウロウロしていた配達員は、俺に気がついたらしく、
一礼してきた。

「あの、すみませんこの家の方ですよね？ ハンコお願いできませんか？」

そう言われた俺は、少し急ぎながら鍵を開けてハンコを押す。

それを確認した配達員は直ぐに立ち去っていった。

「さて……、これは一体何だろう？」

俺は、ハンコを押した小さな箱を見て思う。

「瑞希か、陽輝が何か買ったのか？」

しかし、箱についている伝票には、俺宛てとなっている。

（おっかしいな……。俺こんなの頼んだっけ？）

疑問に思いながらも、箱を自室へと持ち込む。

ボタン！

部屋のドアをしっかりと閉め、コンビニで買った物を漁ってみる。

「最初はこれにしようか」

俺は、コンビニの新商品のスティックパンを取り出して、かぶりつく。

パンは予想以上の美味しさで、飽きない限り毎日食べたいと思う。

「ぶはー、結構腹が膨れたな」

ズズズズズズ。

俺は、パックの飲み物をすべて飲み干したところで、先程の箱に目をやる。

耳を当てたり、箱を振ってみたりして危険物ではないことを確認。

「一応、大丈夫……かな？」

少しビビリながらも、俺は開封。

「てりゃー！」

変な掛け声と共に箱が開かれた。
そこに入っていたのは……、

「なんだこれ？」

それは、どこかのアニメに出てきそうなスカウターに似ていた。

他にも探してみるが、説明書以外何もなかった。

「誰だこんなふざけたの送ってきたのは！」

送り主を探してみると、『白髭 三太』とある。

「って、まんまじゃねえか！」

ハッ！

ノリで思わずツッコミを入れてしまった。

そして時期はずれである。

俺は得体のしれないものを前にしながらも、とりあえず説明書を読むことにする。

超能力開発器

1、まず、スカウターをセットし、スイッチを入れます。

2、終了

「みじか!? なんだこの説明は!?!」

いかにも人を馬鹿にしているような説明書を、俺はグシャグシャに丸めてゴミ箱にシュートする。

(あれ・・・? ちょっと待てよ・・・)

さっき捨てた説明書を、急いで取りに行って、もう一度タイトルを確認。

超能力開発器

確かにそう書いてある。

「ウホオオオ! マジかよ!?!」

俺は一気にテンションが上がり、早速試してみる。

「えーと、まずこれをつけるんだっけ?」

「これってどこにつけるんだ？」

こんな訳の分からないものを前に、俺は戸惑った。

「とりあえず右耳でいいか」

これをつけたら、ちよつと昔のアニメに出てきたキャラクターの気持ちがわかる気がする。

せ、戦闘力　　だと！？　とか言ってるね。

俺は右耳に取り付けて、スイッチを起動させただけだった。

「ガアアアアアアアアアアアアアア！！」

第一話・プレゼント（後書き）

ここまで読んで下さった方々に感謝！

こんなふつつか者ですが、これからもよろしくお願いできたらうれしいです。

次回は、なるべく早いうちに投稿します。

出来れば、評価をしていただけるとありがた……スイマセン、気にしないでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6888y/>

NT'sロード

2011年11月20日20時24分発行